

連続した療育支援に着目した親子通園の取り組みについて

著者名：大阪市更生療育センター 保育士 河村 直美
言語聴覚士 山岸 直美

キーワード：親子通園、療育支援、連続性

要 旨

令和2年10月から令和3年3月まで、大阪市更生療育センターにおいて、親子通園クラス（以下、ぱんだクラス）を設け、保育士と言語聴覚士で取り組んだ。このぱんだクラスは、プレ療育的な位置づけとして、障がい児等療育支援事業の利用が終了する親子を対象に、次の児童発達支援事業のプログラムにスムーズに移行することを目的として、年度途中で新たに少人数クラスを設けてスタートした。このぱんだクラスは、半年間、月2回の頻度で実施した。その中で連続した療育支援という点での成果や親子通園のメリット、また保育士と言語聴覚士の多職種が一緒に取り組むという支援の強みなどを改めて感じられるものとなった。以下に、ぱんだクラスの特徴やプログラムの内容、成果等についてまとめたものを報告する。

1 はじめに

大阪市更生療育センターの療育部門は、福祉型児童発達支援センターや発達障がい児専門療育機関としての役割と、障がい児等療育支援事業を担っている。福祉型児童発達支援事業と発達障がい児専門療育を利用するにあたっては、障がい児通所受給者証（以下、受給者証）が必要となるが、障がい児等療育支援事業は、受給者証は必要とされていない（図1）。

当センターの障がい児等療育支援事業は、療育の入り口的役割が強く、この事業を希望される保護者は、子どものことばの遅れや運動発達の遅れが気になるものの、受給者証を取得して積極的な療育を受け入れる段階までには至っていないことが多い。そのような保護者に対して、早期に言語聴覚士などの専門家が相談に応じ、個別指導や少人数のグループ指導で子どもへのかかわり方や遊び方の助言を行っている。また、この事業は、随時相談を受け付け、一定の回数による支援を行い、その中で子どもの発達を促しながら保護者にも療育の効果を感じてもらうことをねらいとしている。そして、その後、継続的な療育支援が必要と判断される親子に対しては、児童発達支援事業につなげていく流れで進めているが、年度途中で終了する場合、次の療育への途切れない支援の移行が課題となっていた。

今回報告するぱんだクラスの子どもたちの多く

は、1歳半健診でことばの遅れを指摘された後、障がい児等療育支援事業の利用が始まった。その後、年度途中で終了となったため、プレ療育的な位置づけとしてぱんだクラスをスタートさせる運びとなった。

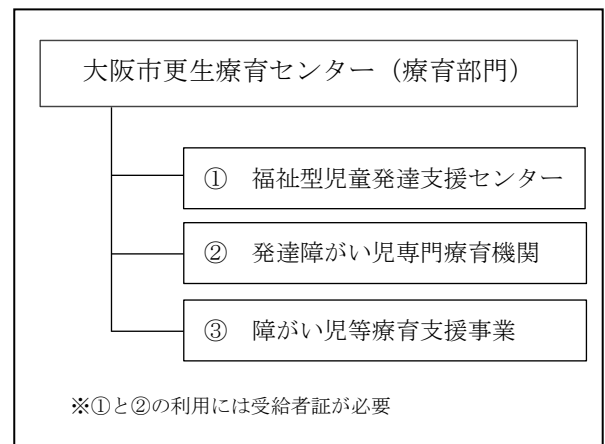


図1 大阪市更生療育センターの役割

2 ぱんだクラスの目的

(1) 連続した療育支援を行うことにより、次のステップへのスムーズな移行を促す。

(2) 小集団の中で、保護者以外の他者とのやりとりを広げていく。

(3) 保護者に子どもへのかかわり方について学んでもらい、今後の療育の土台づくりを図る。

3 ぱんだクラスの実施期間と構成

令和2年10月から令和3年3月の半年間、月2回の頻度で実施。クラス構成は、2歳児4名とその保護者の少人数で、スタッフは保育士1名、言語聴覚士1名の計2名からなる。

4 ぱんだクラスの活動内容

ぱんだクラスの主な活動の流れと内容は以下のとおりである(表1)。また、言語聴覚士を中心に、保護者に向けて、活動の目的やかかわり方のポイントについての事前説明や活動終了後に振り返りの場を設けた(写真1)。

表1 ぱんだクラスの流れと主な活動内容

1	登園時の準備	<ul style="list-style-type: none"> 靴と靴下を脱ぐ 鞆をケースに入れる 出席シールを貼る
2	自由遊び	<ul style="list-style-type: none"> ままごと 車や電車 ボーリング 板すべり 絵本 トンネル お絵かき
3	設定遊び	<ul style="list-style-type: none"> ふれあい遊び 絵本(写真2) 体操 リズム遊び お絵かき 手遊び(写真3) 布遊び(写真4)
4	お帰り・水分補給	<ul style="list-style-type: none"> 帰りのうた あいさつ 水分補給



写真1 言語聴覚士による事前説明の様子



写真2 絵本を読んでいる様子



写真3 手遊びの様子



写真4 布遊びの様子

5 活動場面で配慮した点や工夫した点

(1) 全体の流れについて

①子どもが慣れた環境で安心して活動に参加できるように、登園時の準備→自由遊び→設定遊び→お帰りまでの流れを同じにする。

②活動の内容は、体を使って遊ぶ運動遊び(体操や板すべりなど)や、見る、聞く、模倣するに着目した遊び(絵本:写真2や手遊び:写真3など)や、触ったり風を感じたりして遊ぶ布遊び(写真4)などの感覚遊び、親子でやり取りをしながら楽しむ遊び(ふれあい遊びなど)を子どもの状態や目的に合わせて取り入れる。

(2) 各活動について

①子どもが楽しめる活動をとおして「もっとしたい!」という意欲を引き出し、「もう一回やって!」と大人に伝える(発信する)機会をつくる。

②子どもが十分に楽しみ、達成感を得られるように同じ遊びを繰り返す。

③それぞれの活動の積み重ねを大切にするために同じ活動を一定期間繰り返す。

(3) 子どもへの提示の仕方について

①子どもが、これから取り組む活動に自ら気付き、活動の流れの見通しを持ちやすくするために、視覚支援（現物や写真、シンボル）を活用する（写真5）。

②ことばの理解を補うために、身振りやサインも活用する。



写真5 その日のスケジュールの提示

6 活動場面でのポイントについて保護者に説明した内容とその具体例について

(1) ～ (8) の項目とその具体例を枠の中に示す。保護者に説明する際には、口頭のみだけでなく、活動の様子をビデオに撮り、その映像を見ながら保護者にフィードバックする機会も設けた。

(1) 登園時の準備など、できるだけ子ども本人が取り組めるように大人のサポートを加減していく。

準備の手順がわかりやすいようにシンボルの提示や動線の工夫をする（写真6）。

靴下を履くときに、全行程を大人がしてしまうのではなく、大人が踵まで通して最終的に引き上げるところを子どもがするというように、子どもがやりやすいところから協力動作を促していく。



写真6 登園時の準備の設定

(2) これから何をするのか本人の気付きを促す。

片付けの場面で、ついつい子どもの背中に向かって「片付けるよー！」などと声をかけてしまうことが多いが、大人が片付ける姿を見せてモデルを示したり、片付け用のカゴを子どもの前に提示したりして自発的に片付ける場面をつくっていく（写真7）。



写真7 子どもにカゴを提示して片付けを促している様子

(3) 遊びに対して、子どもがどのように参加しているか、どんな遊び方をしているかを観察する。

それぞれの遊びの場面で、大人のさせたい気持ちが先行してしまうことがあるが、まずは子どもがどこに注目しているか、どんな遊び方をしているかを観察し、子どもの遊びに大人が合わせるようにする。

(4) 子どもからの発信をしっかりと受けとめることを心がける。

遊んでいる場面で、子どもから視線を送られてきたら「ママ、見て！」という発信をしっかりと受けとめて、それに対して大人が反応を返してあげる。例えば、子どもが赤い車のおもちゃを見つけて大人に視線を向けたときに、「車あったね。赤い車かっこいいね！」など。また、その際にアイコンタクトを取ることも大切にする。

(5) 子どもの気持ちを代弁する。

お友だちが遊んでいるおもちゃを取ろうとしたときに、「取っちゃだめでしょ。」と言いたくなるが、まずは、「遊びたかったんだね。」の一言を。

また、遊びが終わった場面で、子どもがひとさし指を立てて要求しているときに、大人が、「もう1回して。」と子どもの気持ちを代弁する。

(6) 他児とのやりとりの場面では、大人が間に入りお互いの気持ちを代弁したりモデルを示したりしながら広げていく。

お友だちが遊んでいるおもちゃを取ろうとしたときに、「貸して。」と大人がことばを添えたり、遊んでいる側の子どもの代弁として、「いいよ。」や「今はぼくが遊んでいるから待ってね。」「こっちのおもちゃだったらいいよ。」などとモデルを示したりしながらやりとりの練習をしていく。

(7) 遊びや活動を「やらせる」のではなく、どうしたら「やりたくなるかな？」や、「やりやすいかな？」を考えていく。

大人は板すべりで遊んで欲しいが、子どもはそちらに行こうとしないときに、抱っこして唐突に滑らせるよりは、子どもの好きなおもちゃを板すべりのそばに置いて興味を高めたり、どのようにして滑るのか大人が滑ってモデルを示したりする。また、体操などの場面で子どもがやろうとしないときも、無理にさせるよりは、大人が楽しそうに参加している姿を見せながら、子どもがやってみようかなと思うきっかけをつくっていく。

(8) 子どもの気持ちへの共感、寄り添いを大切に

子どもがすべり台を滑ったあと、大人に視線を送ってきたときに「やったー！」や「上手に滑ったね！」などと子どもにことばを返して、すべり台を滑って楽しかった気持ちに共感する(写真8)。

遊んでいるときに転んだ場面で、「痛かったね。」と子どもの気持ちに寄り添う。



写真8 すべり台を滑ったあとで、嬉しかったことを親子や他の大人と共感している様子

7 保護者へのアンケートの実施とその内容について

ぱんだクラスの初回、最終回、終了して半年後にそれぞれ保護者にアンケートを実施した。その項目と回答内容は以下のとおりである(回答内容を枠内に示す)。

(1) ぱんだクラス初回

質問①: 来年度集団生活をスタートするうえで心配していること

- ・ことばの発達がゆっくりであるため、集団生活で自分の思いを伝える前に友だちの物を取ったり手が出ないかと心配面が多い。
- ・次年度の3歳児クラスの活動についていけるかどうか。
- ・お友だちに手を出してしまうこと。
- ・まだことばもしゃべれないので、周りとのコミュニケーションが取りづらい。
- ・身の回りのことがまだ十分にできないので、幼稚園で生活できるのか。
- ・ことばがあまり出ていないので、先生やお友だちとのコミュニケーションがとれるか。
- ・できないことが多いので本人が困ったりしないか、集団になじめるか心配。

質問②: 秋スタートのぱんだクラスに通うことに決めたきっかけ

- ・秋から春までの間で、少しでも集団の中に入って友だちや他の保護者や先生から刺激をもらって成長してもらいたい。
- ・友だちとのかかわり方を知り、友だちと遊んだりかかわりを持つ楽しさを知ってもらいたい。
- ・集団生活に入る前にこのクラスに通えるのはありがたい。
- ・慣れた場所、知っている先生がいるクラスだと本人も受け入れやすいと思った。
- ・グループでの療育に参加して本人が楽しそうだった。
- ・ことばに関しても少しずつ変化がみられたので引き続き通いたいと思った。
- ・4月から幼稚園に入園するまでに少しでも集団に慣れさせたいと思った。
- ・大人数の集団生活の前に少人数で少しずつ慣らしていきたい。
- ・大人や同年代の子どもたちと接して成長する良い刺激になると思った。

質問③：ぱんだクラスに期待すること（お子さんに望むこと）

- ・ぱんだクラスでの時間を楽しく過ごしてほしい。
- ・もともと指示が通りにくくテンションが上がると走り回るなど、その場に合った行動ができないので、手遊びや本、リトミックなどに参加できるようになってほしい。
- ・会話ができるようになってほしい（自分の意志でことばをつないでやり取りができる）。
- ・いろいろ学んで成長してほしい。

質問④：ぱんだクラスに期待すること（保護者が学びたいこと）

- ・子どもへの対応、接し方（複数回答あり）。
- ・ことばの遅れに対してどのように声かけをしたら良いのか、タイミングなどを学びたい。
- ・他の保護者の考え方も知りたい。
- ・ことばを促すための効果的な声かけ。
- ・身のまわりのことができるようになるための生活上の工夫があれば教えてほしい。

(2) ぱんだクラス最終回

質問①：大きな集団に入る前の小集団の経験について

- ・集団に入ることによって、友だちの存在を意識したり、楽しく過ごせたりできて刺激になってありがたかった。
- ・少人数の方がリラックスして過ごせた。
- ・お友だちの顔も覚えて良かった。
- ・とても良い刺激になった。
- ・少なかったことばが増えたり、今までしなかった遊びもしたりと遊び方も変わった。

質問②：半年間（月2回）という設定について

- ・月2回でも十分素敵な環境だった。欲張って4回なら嬉しい。
- ・月4回でも良い（2週間あくど忘れてしまうことも多いので）。
- ・期間が短いので1年間とかでも良いと思った。

質問③：活動内容について良かったこと、してほしいこと

- ・子どもの特性などをわかってもらった上で内容がすごく合っていた。
- ・何回も繰り返してゆっくり展開していただき、子どもの変化を楽しんで成長させてもらった。
- ・毎回流れが決まっていて、子どもにも予測できるのが良かった。
- ・絵を見せて「今から〇〇するよ。」とか、子どもにとってわかりやすくすごく良いと思った。
- ・片付けの入れ物にも写真や絵を貼るなど、工夫されていると思った。

質問④：保護者への支援（かかわり方の助言、情報提供など）で参考になったことやもっと知りたかったこと

- ・その都度困ったときは助言していただき、親の気持ちも受けとめてもらったので、日常生活で子どもにあたったりすることが減り、気持ちに余裕をもつことができた。
- ・子どもの目を見て、受け入れる姿勢をとることの大切さがわかった。
- ・いたずらへの対策も参考になった。
- ・いろいろ相談にのってもらったり、時間をとってくださって、わからないことへの助言がすごく助かった。

(3) ぱんだクラスを終了してから半年後

質問①：今、ぱんだクラスを振り返って、良かったと思う点

- ・最初は慣れない様子だったが、最後の方は、お友だちの顔も覚えて、かかわることができて良かった。
- ・毎回決まった流れで過ごすことで安心することができ、本人も楽しめていた。
- ・保育園に入園する前に、集団生活への第一歩の練習になったり、友だちとのかかわりが持てたこと。
- ・安心した環境で楽しくのびのびとした時間を過ごせたおかげで、子どもの成長をすごく感じることができた。
- ・専門の先生もいて、いろいろ話を聞くことができたので良かった。
- ・今のクラスに入る前のステップとしてちょうど良かった。

・子どもの人数が4人と少なめだったので、リラックスできた。
・ぱんだクラスに行くまで、同年代のお友だちと過ごすことや集団生活がなかったので、少人数で同年代のお友だちと遊んだり、同じような悩みを持った親御さんたちと話ができたりして良かった。
・ぱんだクラスの子どもたちや保護者の方、先生方にたくさんかかわってもらい、すてきな時間を過ごすことができた。
・はじめは、子どもに対してどう接したら良いのか、わからないことだらけだったが、先生方や親御さん、お子さんたちと出会えていろいろ知ることができて、子どもにとってもすごく良い経験ができて良かった。

質問②: ぱんだクラスでこういう取り組みがあったらもっと良かったと思う点

- ・親が子どもとのかかわりを学ぶ勉強会。
- ・困りごとを相談する会。
- ・月4回ぐらいあったら良かった。

(4) アンケートのまとめ

ぱんだクラスの開始当初の保護者の主訴としては、ことばの遅れや、お友だちとのかかわり方、また保育園や幼稚園での集団生活に対する不安が強くみられた。また、保護者が子どもに対してどのように接したら良いかや、ことばの発達を促すためにはどうしたら良いかなど具体的な支援を望まれていることがうかがえた。また、ぱんだクラスに通うきっかけとしては、療育を受ける環境が、障がい児等療育支援事業を利用していた時と同じ施設であり、親子ともに慣れた場所ということも考えられる。

次に終了時のアンケートでは、少人数のクラスだったこともあり、活動を通して、保護者と子どもの様子や変化した点、遊びの場面でのかかわり方などについて確認、検討しやすい環境だったことが良かったように思われる。さらに、回数については、月2回よりも月4回の頻度でも良かったという意見もあった。

そして、ぱんだクラスを終了してから半年後のアンケートでは、それぞれ、ぱんだクラスよりも大きな集団での生活が始まっており、ぱんだクラスの取り組みが、そのためのステップアップとして有効だったと思われる意見が多かった。また、生活場面での具体的な支援方法など、保護者が学べた

り一緒に検討したりする機会をもっと設けることができれば、さらに良かったと思われる。

8 ぱんだクラス終了後の進路

- (1) 保育所や幼稚園に通いながら、週1回の当センターの親子通園を利用(2名)
- (2) 当センターの単独通園を利用(1名)
- (3) 保育所に通いながら、他の児童発達支援事業所を利用(1名)

9 まとめ

今回、年度途中で障がい児等療育支援事業が終了する親子に向けて、新たにぱんだクラスを設け、保育士と言語聴覚士で半年間取り組んだ。

このぱんだクラスの特徴のひとつに、保護者も一緒に通う親子通園がある。親子通園のメリットとしては、保護者と同じ場面を共有しながら、子どもの状態を把握し、かかわり方などの支援方法を一緒に確認、検討しながら進められることや、ひとりひとりの子どもの発信を受けとめる大人が増えることで、コミュニケーションにおける子どもの成功体験を積み重ねやすくなることがあげられる。

また、このクラスの構成は、4組の親子ということもあり、活動のねらいや支援方法などの情報の共有や、保護者に対するフィードバックも行いやすかった。

さらに、保育士だけでなく言語聴覚士も一緒に取り組むことにより、集団の療育場面での活動を通して、保護者が気になっていることばやコミュニケーションについても具体的な助言や指導が可能となった。

これらのことから、療育の入り口的役割を果たす障がい児等療育支援事業から、次のステップの児童発達支援事業へ途切れることなく連続して支援をつなげることができたという点では、ぱんだクラスの取り組みは成果があったと考えられる。

10 おわりに

今回、ぱんだクラスについてまとめる機会を得て、親子通園のメリットや多職種(今回は保育士と言語聴覚士)で取り組む支援の強みを改めて認識することができた。

今後も当センターのそれぞれの事業の特色を生かしつつ、事業間のつながりを大切にしながら、それぞれの親子に寄り添った療育支援を目指していきたい。

謝辞

本稿を作成するにあたり、ばんだクラスの子どもたちと保護者の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。心より感謝いたします。

参考文献

- 1) 竹田契一・里見恵子：子どもとの豊かなコミュニケーションを築くインリアル・アプローチ，日本文化科学社，東京都，1994
- 2) 竹田契一（監修）・里見恵子・河内清美・石井喜代香：実践インリアル・アプローチ事例集，日本文化科学社，東京都，2005
- 3) 佐藤暁：わが子に障がいがあると告げられたとき，岩崎学術出版社，東京都，2017
- 4) 佐々木正美（監修）・安倍陽子・幸田栄：発達障害の子どものびのび暮らせる生活サポートブック幼児編，すばる舎，東京都，2012